

J **apanese text**

2009年 春/夏号 日本語編

Works

いかだ
筏

画・文=篠田桃紅

p.009

山深い川上から川下に流す木材。
 その上に花をのせて、川下のひとに届ける、昔からの
 優雅な習わし、花筏。
 あわれ深い、人の思いの届け方。

自然

大雪山・花の賦

——北の大地を駆け抜ける春と夏

写真=伊藤健次 文=編集部

p.010

北海道の中央に聳^{そび}えるたおやかな白い峰。
 標高2000メートル級の山々を擁する大雪山は、一年の半分
 を雪に覆われる。
 山というよりは大地か。茫洋とした広大でなだらかな地形。
 北海道の先住民族であるアイヌの人々はここを「カムイミン
 タラ（神々の遊ぶ庭）」と呼んだ。
 この高山帯で数多く出土している黒曜石の鏃^{やじり}を使っていたの
 はアイヌの人々の祖先か、あるいはそれ以前の古代の人々か。
 ヒグマが遊び、チュルツ、チュルツとナキウサギの鳴き声が
 こたまするこの庭で、神々を追って狩りをしていたのだ。
 5月～6月、このツンドラの大地がようやく目覚める春、雪解け
 の始まったところから植物たちがすぐに顔を出す。
 白いベールが徐々にめくられるにつれ緑の絨毯が現れ、や
 がて大地は一面のお花畑へと装いを替える。
 大陸と地続きだった北海道が最後の氷期を終えた約1万年
 前、植物の多くは北へ回帰し、一部がこの大雪山系に残った。
 大雪山は、氷期の終焉とともににおいてけぼりにされた北の
 植物たちの揺り籠である。